

# Newsletter

July 2005

<http://www.aack.or.jp>

## 目次

大日岳積雪地形調査がわかりました 荻野和彦・岩坪五郎……………	1
AACK人物抄 鈴木信さん(一九二一—一九七九) 平井 一正……………	6
大日岳遭難について 本多 勝一……………	10
理事会決議録……………	11
総会決議録……………	13
海外登山・探検助成制度の創設……………	13
AACK遠征基金について……………	14
日本山岳協会・山岳共済(一般共済)について……………	15
新入会員の紹介 栗本俊和氏 前田 栄二……………	17
書籍紹介 「山・わが生きる力」 白旗史郎著(新日本出版社) 阪本 公一……………	17
会員動向……………	18
訂正……………	19
雲南懇話会の「報告とField Work」の案内……………	19
編集後記……………	20

## 大日岳積雪地形調査がわかりました

荻野和彦・岩坪五郎

かねてご支援いただいたてきた大日岳積雪地形研究に関する現地調査が無事に終わりました。調査の経過を簡単に報告します。

北アルプス大日岳および周辺山域はいわゆる豪雪地帯にあります。大量の雪が山稜付近に巨大な雪庇、吹き溜まりを形成します。あまりに巨大であるため、また発達する形状があまりに変化に富んでいるため、それを雪庇という言葉でカバーすることは難しいと思います。われわれはそれを積雪地形ととらえ、その形成・消滅(崩壊)過程の実証的研究に取り組むことにしました。

この発端は二〇〇〇年三月に起こった大日岳山頂での雪庇崩落事故です。文部省(当時)登山研修所が企画した冬山リーダー研修会に参加していた二名の学生が亡くなり、亡くなったふたりの班の講師だった高村真司さんが書類送検されました。遺族は国を相手取り損害賠償請求訴訟を起こしました。刑事事件は起訴猶予の処分が出されましたが、民事事

件はなお係争中です。山岳事故が事件に発展しました。事件については法律に基づく議論が法律家によってなされることでしょうか。しかし研究者、登山家としてわれわれは事故について未解明のまま残された課題に取り組む必要があるのではないかと考えました。巨大な量の積雪はわれわれに何をもちたらずのか、このような事故を防ぐために、われわれは何をしなければならぬのか、を考慮しておく必要があります。

われわれの調査目的は大日岳山頂付近の巨大雪庇の形成ならびに消滅(崩壊)過程を解明することです。そのためわれわれは次のような調査項目について具体的な調査を実施しました。

山頂付近に発達した巨大雪庇の積雪内部構造の地中レーダー(SiR・2000)による探査

山頂付近の積雪表面形状(積雪地形)の測量

山頂付近の積雪深分布の測定

最高点付近(いわゆる地山の最高点)を基点とする幅約二m、長さ三七m、最大深二九二cmのトレンチの掘削

積雪断面の層構造の観察・記載ならびに密度、硬度、含水率の計測

基点から五、一〇、二〇mの四地点でそれぞれ深さ一〇〇、四五〇、

四二〇、四四〇mのピット(竪穴)の掘削と積雪深部の層構造の観察・記載

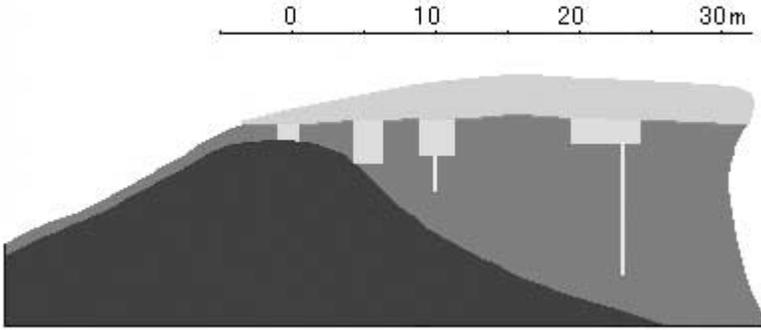
一〇、二〇m地点でピット(竪穴)底面からハンドオーガー(積雪の層構造を調べるためコアサンプルを採取するドリル、最大深一〇mまで)によるそれぞれ二八〇cm、九〇〇cmのコア試料による層構造の確認

大日岳付近の山稜に発達する雪庇、吹き溜まりなど、積雪地形の観察、記録

調査の成果は鋭意取り組んでいる詳細なデータの解析の結果に待つこととなりますが、



大日岳山頂に張り出した巨大雪庇の一部。大日山谷側から撮影。  
撮影：荻野和彦



トレンチ概念図

図は今回の調査の概略を示すものである。積雪表面と地山の表面地形を測量成果によって作図したものを最終的には報告する予定である

少なくとも今、言えることは、このような規模の雪庇断面の掘削調査は世界に類を見ないものであるということでしょう。二〇〇〇年三月の事故調査にあたった富山大の川田邦夫教授は本格的な雪庇研究を始めなければならぬと考えていました。雪庇の発達、形成過程でいくつもの仮説をえていましたが、それが断面にまさまざと現れていることに感嘆の声を上げました。

調査はまず雪庇表面の形状観察に始まりました。雪庇先端付近から手前に向かって、ひろ

く丁寧に観察したところ、今年は先端から約三mにひび割れがあること、そのさらに手前約三mのところはふたつ目の裂け目があることがわかりました。ふたつのクラックを挟んで、二本の杭を約五mの間隔で雪中深く打ち込みました。この杭の間の距離をスチール巻尺に五千口の張力を加えて、正確に測定するのです。繰り返し測定すれば雪塊の動きを感じできると考えたのです。川田式雪塊移動検知装置です。調査全期間を通じて、伸びは一日三丁二〇mm程度でした。

山本一夫さんも危険察知の工夫をしました。上のふたつのクラックをはさんで縦方向に糸を張っておく。糸が切れたら雪塊が動いたものとみなして、とりあえずいったん作業を中止して退避することに決めていました。山本式雪庇崩落危険察知装置です。この糸は積雪に埋まったので、その都度、掘り出しては張りなおしをしました。調査期間の最後まで切れることはありませんでした。

雪庇上での作業は危険です。川田教授は今年の積雪状況を見て、積雪表面の最高点、雪が作ったみかけのピークより風下側を崩壊危険領域としました。その領域に入るときは作業であれ、計測であれ、写真撮影であれあるいは単なる散策であれ、必ずロープをつけ安全を確保することを要求しました。雪庇上の作業の安全確保のために山本さんたち、山岳ガイドの雪氷技術が存分に活躍しました。

大日岳の三角点を雪の中から掘り出しました。周知のことですが、三角点は最高点のやや西より、大きなケルンの傍にあります。大

日小屋主の杉田健司さんが「三角点はここだ」といったところからそれは掘り出されました。三角点を掘り出す必要があったのは、積雪表面の地形測量成果を測地系に結合するためです。積雪深分布の測定結果とあわせて、山頂付近の地形、積雪地形の形状が明らかになります。地中レーダーは構状のアンテナ部と本体に分かれています。アンテナを一定速度で雪面上を滑らせるのはなかなか難しいのですが、加藤智司さんはすぐに慣れて、名人芸を発揮しました。トレンチの近くは1m間隔、少しはなれたところは2m間隔で雪庇の先端近くまで、積雪内部構造を読み取るデータが記録されました。最初の日、山頂で地中レーダー操作を始めたとき、うまく動作しませんでした。調査の売り物のひとつのデータがとれない。どうなることか、やきもきしたものです。飯田さんは応用地質(株)の利岡徹馬さんに電話しました。前日に立山カルデラ砂防博までわざわざ出張してきてレーダーの講習会をしてくれた人です。しばらく技術的なやりとりがつついた結果、レーダーは積雪層の中のデータを送ってくるようになります。

トレンチは基点地山最高点付近)からマイナスイ五mの地点から掘り始めました。マイナスイ五mというのは風上側のことです。トレンチの始点で積雪深は約六〇cm。トレンチ幅約二m。基点での積雪深は約一三〇cm。基点の地山レベルで水平に風下側に向かって掘り進みました。トレンチ掘削の二日目、トレンチ始点から一五m(基点から一〇m)のところ

上下、縦方向に三〇mばかりの穴が空きました。掘り広げてみると水平方向につながる空洞になりました。空洞の雪の表面には霜が載っています。天井の氷板から大小の氷柱が何本も垂れ下がっています。積雪内部に生じたギャップです。古い雪庇前面のフェースであったことを物語るものだと言います。さらにトレンチを掘り進んで二〇m付近に達したとき、トレンチの両サイドの断面に縦に走る裂け目が見られました。雪庇前面の雪塊が前に動いたことで生じたクラックだと考えられます。二五m付近にはやや顕著なものがいくつも認められました。積雪表面は雪に覆われているためクラックは見えないのです。雪庇ができて崩れ、さらに新しい雪庇が覆い被さっていき、巨大な雪庇が発達していく様子がありありと見えるようです。

この日、雪庇最先端部に溝をつくって、大日山谷側に開孔部を作ることに成功しました。滑り出しは順調だったのですが、二〇～二二日の三日間はげしい風雪、視界の悪い日が続きました。この間の降雪は四〇～六〇cmに達し、せっかくな掘ったトレンチは埋まってしまいました。四月二三日、快晴後曇、午後は強風の中の作業でした。前日に積もった雪を除き、トレンチ作業を続けた結果、一時四〇分頃雪庇前面側の溝とトレンチが貫通しました。雪庇最前面作業にがんばった高津充於さんはみごとなチェーンソーの使い手になり

ました。

基点(地山最高点付近)でビット(鑿穴)を掘ったところ、約1mで地山に達しました。五m地点では四・五mでした。このビットの底で穴を掘り続けた島田和昭さんは地山が見えませんでした。かれのがんばりを讃え、このビットをわれわれは島田ビットと呼んでいました。

一〇m地点では四・二mのビットを掘り、ビット底面からハンドオーガーによって、長さ



ハンドオーガーで掘り出した積雪コアを調べる川田教授。  
撮影：横山宏太郎氏

二・八mのコアを採取しました。二〇m地点では四・四mのピットの底面からコア長九・〇mのサンプルを取りました。積雪表面から約一三・四mの深さまでの積雪層を調べたこととなります。

当初、行動指揮の山本一夫さんが決めた作業時間は八時三〇分から一五時三〇分でした。研究指揮の飯田肇さんは作業の初日に時間がないから、残って作業を続けると言い出しました。このことに対して越権的秩序破壊だといった人はひとりもいませんでした。みんな嬉々として作業を続けたよう見えません。最後の日(二五日)に作業が終了したのは一八時四五分でした。高山湾に沈み行く夕日を背に、小屋への引き揚げは夕闇迫るなかでのスキー滑走になりました。

食糧計画を高津充於さんが担当しました。江口安香さんと太丸裕子さんは割烹着を着て大日岳の頂上に立ちました。連日、多いときには三〇人以上の食事を準備しました。

みんな実によく働きました。こうして、これまでは川田仮説であった雪庇形成過程がトレンチに掘った積雪断面に実証的に示されたのです。雪氷学の一分野、積雪学あるいは雪庇学の理論化が目の前に展開していきましました。こんなにも巨大な量の積雪が高山の山稜付近にさまざまな形に堆積していることに地形学、環境科学、気象資源学の視点から光を当てたのはわれわれが初めてです。久々の新発見に感動しないものはありませんでした。

調査期間は先遣隊が入山した二〇〇五年四

月一七日から、すべての作業を終えて下山した二七日までの間でした。作業の安全、確実に期すために現地基地を大日小屋に、連絡事務所を立山町千山荘において関係各機関と綿密な連絡を取りあう調査体制をつくりました。

齋藤惇生(新河端病院名誉院長、元日本山岳会会長)を総責任者として、岩坪五郎(京都大学名誉教授)が連絡事務所を、荻野和彦(滋賀県立大学名誉教授)が現地基地を担当しました。

研究指揮を横山宏太郎(中央農業総合研究センター北陸研究センター気象資源研究室長)、川田邦夫(富山大学極東地域研究センター教授)飯田肇(立山カルデラ砂防博物館学芸課長)が、行動指揮を山本一夫(日本山岳カイト協会認定国際カイト)が執りました。

調査参加者は本部、サポーターたち、一般参加者などからなります。総勢五一名です。一般参加者は日本山岳会京都支部、JACCアルパインスキークラブに所属するメンバーでした。

参加者はそれぞれグループに分かれて行動しました。

四月一七日に先遣隊(山本一夫、杉田健司、川田邦夫、飯田肇)がヘリ便で入山しました。調査用器材や食料などの荷揚げ、最後の撤収など前後六便の朝日航洋のヘリ便をチャーターしました。こんなことができたのは元朝日航洋(株)取締役技術センター長の渡辺仁さんの尽力のおかげです。二トンに近い物資を

空輸できたことは今回の調査の成功に大きく貢献しています。マッチョこと京大山岳部OBの渡辺仁さんに心からの謝意を表します。室堂から奥大日岳を越えるルートをとった本部パーティ(荻野和彦、早川英夫、酒井展弘、加藤智司、角谷道弘、高村真司、降旗厚

酒井秀光、三浦靖男、笹倉孝昭、高津充於、島田和昭、黒田誠、樋口和生、大森義彦、清岡謙一、江口安香、太丸裕子)の入山は好天に恵まれ楽しいものでした。角谷道弘さんはみことなルート仕事を指揮しました。これに引き換え、四月二〇日に入山を試みたJACCアルパインスキークラブ早川隼パーティ(日出平洋太郎、福土節子、木村喜代志、松原尚之)、四月二二日入山予定だった京都支部松下征文パーティ(杉山イタル、伊原哲士、駒井治男、木村芳弘、津田美也子、河野直子、丹尾琴絵)、JACCアルパインスキークラブ増山茂パーティ(堀越仁治、伊藤英弘、志賀尚子)は風雪に視界をさえぎられて四月二三日まで室堂、千寿が原に足止めを食いました。ようやく天候は回復した二三日、まず齋藤惇生、横山宏太郎、齋藤清明、秋野子弦らが資材を抱えるようにヘリに乗り入山しました。待機していた入山パーティにJACCアルパインスキークラブ山田和人パーティ(福岡孝昭、野口いづみ)が加わりました。入山するパーティを出迎えるため、黒田誠さんは奥大日岳まで二度も往復しました。前日までの悪天の影響がバス、ケーブルの運行再開を遅らせたため、室堂出発が予定より大幅に遅れ、メンバーの何人か(福岡孝昭、松下征文、伊原哲

# 巨大な雪庇掘削調査

## 2501m大日岳 学者と登山家協力



調査が行われた大日岳の山頂付近。山頂から右の方向に雪庇ができていた。4月

### 形成・崩落メカニズム探る

北アルプスの大日岳(標高2501m)に築いた雪庇の調査が、はじめて行われた。雪庇の形成や崩落のメカニズムを探るため、学者と登山家の協力による調査が行われた。雪庇の形成や崩落のメカニズムを探るため、学者と登山家の協力による調査が行われた。



トレンスを掘削する登山家と研究者。4月

雪庇の形成メカニズムを探るため、学者と登山家の協力による調査が行われた。雪庇の形成や崩落のメカニズムを探るため、学者と登山家の協力による調査が行われた。

雪庇の形成メカニズムを探るため、学者と登山家の協力による調査が行われた。雪庇の形成や崩落のメカニズムを探るため、学者と登山家の協力による調査が行われた。

雪庇の形成メカニズムを探るため、学者と登山家の協力による調査が行われた。雪庇の形成や崩落のメカニズムを探るため、学者と登山家の協力による調査が行われた。

雪庇の形成メカニズムを探るため、学者と登山家の協力による調査が行われた。雪庇の形成や崩落のメカニズムを探るため、学者と登山家の協力による調査が行われた。

士、駒井治男、丹尾琴絵)は途中で入山を断念せざるを得ませんでした。

四月二四日は快晴に恵まれました。この日多くのメンバーが下山しました。入山に苦汁をなめたパーティも下山はコット谷、人津谷、大日平などへの大滑降を楽しみました。京都支部関本俊雄パーティ(関本俊雄、野田純一)は室堂ルートで入山しましたが、一五時頃には山頂での作業に合流するという快調さでした。

四月二六日、濃霧です。きわめて視界が悪いなか、関本パーティが大日平ルートにより下山しました。前日のハンドオーガー作業を最後までやってもらったために、悪天の中の下山になりました。ほとんど平坦な大日平は視界が悪いとルートが掴みづらくなります。かすかなトレースが残っていたといいますが、GPSを駆使して無事下山したとの知らせを受けるまでずっと安否を気遣っていました。この日山頂では落雷を経験しました。パシツという音が閃光より早く聞こえたように感じました。後でわかったのですが、テントの中のコヘルに直径1cmほどの丸い穴がいていました。横山宏太郎さんは積雪断面にリンクを振り掛ける作業をしていました。その他、それぞれに金属製の器具を手にして作業に当たっていたわれわれが直撃を受けなかったのは、まったく幸運というほかありません。

四月二七日、天候が回復しました。前日、濃霧にさえぎられた最後の作業、積雪断面の写真撮影のために山頂に上がりました。さすがに感無量でした。

へりによる撤収の際、荷物のフックを掛けたままなかなか飛んで行くことはしません。山本さんは荷物を安定させているのだと言いました。実は重量制限すれなかったのです。ほんの数秒が長く感じられました。窓から顔をのぞかせた整備士の瓶田さんが手を振りました。やっと飛び上がりました。

残るのはわれわれが大日平を目指して、飛び出していくことのみです。思い思いに大滑降を心行くまで楽しみました。七三歳の早川英夫さんは自分の足で大日岳に登った最高齢者です。「キャッホー、ヤッホー」と腹の底から歓声を絞りだしました。

大日岳の積雪地形調査はこうして無事現地作業を終えました。この調査は雪氷学研究の最前線を切り拓くものであるということはすでに述べました。この成果をもたらしたのが研究者、職業的登山家、非職業的登山家の三者の連係プレイ、協働であったことは意義深いものと高く評価してよいと信じます。われわれの知的挑戦はみごと成功を収めました。調査の成果を生かすか、生かさないか、この調査から学ぶか、学ばないか、問われるのはこれからです。

最後になりましたが、この調査は国土交通省立山砂防事務所、文部科学省登山研修所、立山カルデラ砂防博物館の支援を得ました。またこの調査に関心を寄せ、献身と貢献を惜しまれなかつたAACK会員各位に深甚の謝意を表したいと思えます。

## AACK人物抄

### 鈴木信さん

(一九九一—一九七九)

平井 一正

AACKにはかつて二つの潮流があった。ひとつは垂直指向型の純粹登山派であり、もうひとつは水平指向型の学術探検派であった。この二つの流れは拮抗することなく、うまく調和してやってきた。しかしこのふたつの流れが顕著に現れたのが一九五三年のAACK総会で、AACK創立二五周年を記念してカラコルムに学術登山隊を送るという話もちあがった頃である。最初は登山隊も含まれていた計画が、いろいろな事情から学術探検派と目された今西錦司(以下敬称略)が、登山隊を切つて学術だけの学術探検計画に変更してしまつた。これが一九五五年の京都大学カラコルムヒンズークシ学術探検隊である。おさまらないのは純粹登山派と自他共に任じる四手井綱彦である。ここで今西、四手井の対立があり、登山の正統を錦の御旗にする四手井後醍醐天皇と、情勢をみて戦略を変える今西足利尊氏の南北朝の争いにたとえられた。そして南朝の忠臣楠正成にたとえられたのが、これも登山正統派である鈴木信であった。(四手井は物理学、鈴木は農芸化学を専門)

鈴木は三高山岳部の発展と人材育成に尽力



し、さらに現在のAACKの基礎を築き、その発展に大きく貢献した人物である。京大生るとき、内蒙古学術調査隊の隊長で行ったが、あくまでも純粹登山派であり、その真面目、誠実な人柄は忠臣といわれるのにふさわしく、山岳部の後輩には誠実に悩みや相談のつてくれる信頼すべき先輩の一人であった。

それほど功績のあった人にもかかわらず、鈴木について知る人は少なく、やがて歴史に埋没しようとしている。かろうじて鈴木を知っている私よりも、もっとくわしく彼を知っている適任者もいるかと思うが、とりあえず資料を精査して鈴木の伝記をまとめた。

### 一、三高時代

鈴木は明治四四年(一九一一年)五月八日福岡市で生まれ、京都で育った。一九三一年四月、鈴木は京都一中から三高に進んだ。そして山岳部に入部。このとき同期に四手井綱英、杉山佐一などの名前がある。このとき鈴木は二〇歳、何故かかなりおくてであった。そしてその年の九月、小野寺、四手井らと塩見、農馬、北岳、仙丈と登っている。鈴木にとってははじめての日本アルプスであった。これを皮切りに彼の活躍がはじまる。

一九三三年四月、俵、吉川と三人で鹿島槍の鎌尾根を下っていたとき、鈴木ともうひとりが滑落、一人の確保でそれをとめたが、ザイルが鈴木右足の巻き付き、停止の間張りが切ったザイルのために右足を骨折するアクシデントがあった。鈴木は父親も京都駅まで出迎え、鈴木は恥ずかしかつたと報告に書いている。

一九三四年、鈴木は山岳部のプレジデントとなる。当時部員は三年六名、二年一〇名、一年三名、計一九名という充実したものであり、部は活気に満ち、今西、西堀時代の黄金時代の復活を目標としていた。しかしその年の秋、大変な事が起こった。十一月、単独で鹿島槍東尾根を登った三年生の内藤が疲労凍死、その遭難騒ぎの最中、さらに王滝川から御岳に登っていた三年生の俵、二年生の馬嶋が行方不明という報告に接する。今西、西堀、高橋、酒戸らOBも救援にかけつけたが、御岳パーティは翌年夏まで続けられた捜索にも拘わらず、結局発見されなかった。優秀な上

級部員を失い、三高山岳部は壊滅的打撃を受けた。この遭難のために、部は沈滞し、二年生は半数がやめ、一年生は全員がやめた。そして翌年は三年五名、二年〇、一年四名、計九名となってしまう。

プレジデントであった鈴木は、この遭難の責任を痛感し、山岳部の再建と改革に全力で取り組んだ。そして卒業以後も後輩と精神的に山行を共にし、きめ細かい指導を行い、優秀な部員を育てた。鈴木は報告一二号に書いている。

「山に登れ、それがどういう動機によってもいい、山に登れ、それが部の正統だ。パイオニアの精神のみで三高の正統とするには余りにも偏狭である。鈴鹿、比良ばかりを登るのが異端者でもなければ、千島の遠征に行つた者のみが正統的登山者でない。要は山に登れ。山に登らぬものこそ異端者である」。(注、この鈴木言葉は今のAACKにもあてはまるのではないだろうか)

一九三五年四月、鈴木は京大農学部農林化学科に入学する。京大生になっても鈴木は活動の舞台は三高山岳部であり、多くの山行きを三高山岳部の後輩と共にした。

中村恒雄が三高山岳部報告一二号に三高山岳部部史をかいている。それによると三高山岳部の歴史は次のように分類されるとある。

- 一九二二―一九二三年 三高山岳会時代
- 一九二二―一九二六年 今西時代
- 一九二七―一九三〇年 本野時代
- 一九三一―一九三四年 長谷川(杉山)時代

注意してほしいのは、鈴木時代とある一九三五年は鈴木は京都大学の学生であった。彼の偉さは卒業してからも部の指導を続け、再建に努力したことである。三高山岳部には、ススキマコトハエライヒト、アレマアコレマア、ではじまる歌があつたそだが、残念ながら歌詞は不明である。(ご存じの方は「一報ください」)

## 二、京大学生時代

梅棹忠夫や四方治五郎が三高に入學してきた一九三六年は、まだ遭難の痛手からさめやらぬこういう雰囲気のみであつた。鈴木は梅棹らを再建の中核として鍛えた。まず南アルプスの聖岳に梅棹、池田をつれて登つた。遠山川から聖岳、赤石、前岳、小河内岳、三伏峠に達した。このあと鈴木は梅棹らをつれて北アルプスに行く。上高地、槍、三俣蓮華、黒部五郎、太郎平、薬師往復、有峰というコースであつた。梅棹は鈴木に徹底的に登山技術をたたきこまれたと述懐している。

一九三七年三月、鈴木は中村、四方、梅棹とともに黒部源流に入り、スキーで水晶岳など源流の山々を登つた。この山行によつて部は完全に自信をとりもどし、遭難の痛手から完全に立ち直つた。鈴木は努力が実を結んだ。以後鈴木は冬のわらび平スキー合宿に毎年参加し、後輩の指導に当たり、さらに秋の劔岳、春の立山東面、日高などに山行を重ねた。鈴木はわらび平スキー合宿参加は終戦後も続い

た。「鈴木はスキーはバラレル、インナーリンの回転はみごとなもの、さすがと思つた記憶がある」と広瀬幸治は語る。

当時京大には今西らによつて再建された旅行部があり、鈴木もそこに顔を出していた。ただ旅行部の連中よりも鈴木はもつぱら三高山岳部の後輩と山行を共にして、旅行部での活動は次に述べる蒙古行き以外は不明である。

一九三八年AACKは木原均隊長の學術調査隊を内モンゴリアに送つた。この計画はK2などヒマラヤの夢破れた今西らが、大陸の奥地の探検にその情熱のはけ口を求めたものである。今西、宮崎、加藤など総勢一五名の隊であつた。八月一六日から一〇月一〇日までであつたが、実はこの約一ヶ月前の七月二五日から八月二一日まで、鈴木は、金子茂、喜多豊司、今西寿雄、周布光兼など京大の旅行部の学生ら八名を率いて、内モンゴリア一帯の生物学、農学、地理学的調査を目的とした遠征を行った。両隊は独自に行動したが、八月二一日に張家口で合流し、先輩学生共大いに語り、歌い、懇親を深めた。学生隊はそこで解散し、周布と金子は學術調査隊に加つた。

この遠征は三高時代から育んでいた鈴木はヒマラヤへの夢が、形をかえて実現したのである。資金調達の困難、周囲の無理解などによつて学生隊は何度も暗礁にのりあげた。何故両隊はわざわざ調査隊と学生隊に分けたのか。文献ではそこは不明であるが、推測すると、鈴木は学生だけでなくか海外遠征をや

りたかつたのではない。鈴木は面目躍如たるものがある。これは鈴木は海外遠征の最初で最後のものではなかつた。

一九四〇年、鈴木は京大を卒業する。

## 三、AACKの登山正統派として

鈴木は京大で研究生生活を続ける傍ら、三高山岳部の指導を熱心に続けた。その傍ら、部屋にあつたヒマラヤの文献をよく読んで研究していた。そのひとつのエピソードとして、G. Seligman "Snow structure and ski fields" (London, 一九三〇)を戦後いち早く取りあげ、それを三高山岳部の現役部員に分担翻訳させたことがある。樋口敬二、長谷川喜代三、末包慶太、山口亮らが翻訳に当たり、アドバイス役にすぐ上の先輩梅田敏郎、小林一良といった人々も時々参加したと聞いている(この本はまだ和訳が出版されていない)。

終戦後、三高山岳部はすんなりと京大山岳部に移行したのではないといふことは、すでに書いた(平井・京大山岳部前史、ニユースレター八号、九八年二月)。当時すでに藤平、林らが作つた山岳部があつたが、彼らは主として岩登りを主とし、これに対してオールラウンドな登山を指向していた三高山岳部出身の山口、広瀬らは反目していた。特に貸した装備の不始末な返却に怒つた山口らは、三高山岳部の伝統を引き継ぐ新しい山岳部、旅行部を作ろうといふ動きをした。このとき鈴木が、山岳部に合流し、そこで三高山岳部的な山登りを植え付けるべきであると山口らに忠告した。この指示のおかげで、山岳部は一本

にまとまったのである。

鈴木は純粹登山派の中心であり、すでに一九四七年「岳人」創刊号の巻頭に、ヒマラヤへの夢をそだてるための基礎組織の必要性を説いている。そして一九五三年のAACKアンナプルナ登山隊のときも、ヒマラヤに行きたいと熱望した。しかし種々な理由から断念し、登山隊の遠征事務局長を務めた。ノウハウも何もわからない、AACKはじめてのヒマラヤ遠征の準備から後始末まで、その苦勞はたいへんなものがあったと思われる。そしてこのノウハウはチヨゴリザのときの近藤良夫事務局長にひきつがれている。

その後の一九五五年のカラコラムヒンズー



クシユ学術探検隊成立の過程でも、鈴木はあくまでもAACKの正統は登山であるとして、その目標をサルトルコカンリにおき、その実現に努力した。しかしシアチェン氷河に区域は困難であり、また今西の策謀もあって五年の隊は学術調査のみの隊となった。今西ら昭三組に最も信頼のあった鈴木は、AACKがネパールからその目標をカラコラムに的を絞ったとき、その目標とすべき山の選択をまかせられた。サルトルコカンリはその過程で浮上してきたものである。

鈴木は五五年に登山隊が実現しなかったことに不満であったが、以後チヨゴリザ登山隊実現に努力する。そして脇坂、山口など若手のよきアドバイザーになった。当時金沢にいた私は自分のヒマラヤへの熱意を知ってもらいたくて鈴木に手紙を書いた。印刷したようなきれいな字で返事を頂いたことは強く印象に残っている。そして鈴木はサルトルコカンリ計画は、一九六二年の四手井綱彦隊長の隊で実現した。

農学部地下の天井の低い薄暗い研究室で、世の中の悩みを一身に背負っているというようなしび顔の鈴木の影響が消えない。寡黙の人であったので一層そのように見えただのかもしれない。

当時お宅は東一条の日独会館の裏、泉殿町にあり、私も一度おつかがいしたことがある。美人の奥様と飼っていた猫が印象に残っている(子供はいない)。このときお会いした奥様はその後亡くなられ、鈴木はその後再婚し、晩年は幸福であった。大学が遠かったことも

あり、鈴木とAACKの関係はだんだんと疎遠になっていった。

なお余談であるが、同志社大学山岳会の長老である鈴木良彦氏は鈴木弟であり、一九四二年に同志社大学経済学部を卒業し、ヒマラヤ、カラコルムの研究者として活躍した。

#### 四、研究者としての鈴木

鈴木は大学卒業後、農学部農林化学教室志方益三教授の研究室で、当時は最先端のポラログラフィの研究に従事した。ポラログラフィは一九二五年、チエコにおいて、志方ハイロフスキーにより創始された最先端の研究であり、志方研究室は我が国のポラログラフィ発祥地であった。四二年に志方教授が満州国大陸科学院に赴任のあとは、創始以来の志方教授の研究協力者であった館勇先生が教授になり、以後鈴木は館教授と協力してポラログラフィの基礎理論と実験の研究を続けた。

戦中戦後を通して、今とは比較にならないほど物資にも人手にも不足していた当時に、鈴木はすぐれた実験化学者として、理論的解析と実験に関して多くの先駆的成果をあげた。業績の説明は専門家以外にとっては興味がないと思われるので省略するが、鈴木の研究成果は五四年に発刊された「館勇編 ポラログラフィ」(岩波)に多く含まれていることを付言する。

鈴木は実験が終わると、農学部裏にあったテニスコートでよくテニスを楽しんだ。大きな声を発することもなく、腰に手ぬぐいを挟

み、淡々とボールを打ち返していた。奥田東先生や木原均先生等もゲームのお相手にされていた。

一九五九年にはミシガン大学エルヴィン教授のもとに留学し、共同研究結果二編を海外学会誌に発表している。これほど優秀で研究業績も多かった人であったが、不運なことに学位取得も遅れ（一九五六年）、長い間助手の地位に甘んじた。上が詰まっていたせいもあるが、鈴木が登山に打ち込む姿勢が、当時農学部のプロス教授に気に入らず、冷遇されたとの説もある。プロス教授にいらまれないように、山をあきらめた山岳部出身者もいた中で、鈴木がそういう辛い立場にあっても、自分の研究を推進し、山をあきらめなかったことは、敬服に値する。もし鈴木が順調に教授になっていたら、AACKの動きもかなり変わっていたであろう。

鈴木は一九六〇年アメリカから帰国後、秋に近畿大学工学部教授に就任した。近畿大学でも研究と教育に熱心にとりくみ、終生変わることなく、後進の範となった。学会ではポラログラフィ学会の会長を務めるなど、多くの人に慕われた。ヒマラヤ登山におけると同様に、研究の場にあっても、常に身を日陰に置き、後輩を育て、花開かせた一生であったといえよう。そのような運命であったといえるかも知れないし、また鈴木自身がそれを知り、望んだ道であったのかもしれない。

鈴木は一九七八年の東北大学での討論会には奥様を同伴して出席したが、その後ガンのため、近畿大学付属病院に入院、一九七九年

五月一日に亡くなった。

（志方、館岡先生の研究室は今日の大学院農学研究科応用生命科学専攻生体高分子化学教室として、その生物電気化学に関する輝かしい伝統を引き継いでいる。）

以上ふりかえってみると、鈴木は常に山岳部、AACKのことを考え、その歴史の岐路において重要な役目を果たしてきた。斗酒なお辞せずといった酒豪であったが、高歌放吟されることもなく、決してくずれず、静かに人の話をきくという酒であった。梅棹は言う、鈴木は厳しかったが、誠実な紳士であった。後輩に対しては非常に親切であり、一年を通して山の楽しみを教わった。彼から教えてもらったことは非常に多い。

あるとき私の山岳部の仲間が、鈴木にピッケルを借りに行ったことがある。それをきいた広瀬が「めくら蛇に怖じずやなあ」と言った。私は鈴木はこわい、きびしいということを知っていたので、会うのをためらっていたこともあったが、実際に接してみると暖かい人であった。ただいい加減なことは許さないという厳しさがあつた。

この原稿を書くに際して、武庫川女子大学名誉教授小出真次先生には鈴木信先生の研究内容まで詳細をお教えいただいた。さらに京都大学名誉教授千田貢先生には写真提供にお骨折りをいただいた。同志社大学平林克敏様、また梅棹忠夫、近藤良夫、山口克、樋口敬二、広瀬幸治、左右田健次の各会員にはいろいろ

とご教示賜った。特に左右田会員は小出、千田先生をご紹介していただき、貴重なコメントをいただいた。記して感謝する。

#### 参考文献

- ・三高山岳部報告九（一二号）（一九三二〜一九三三）
- ・梅棹忠夫、山の回想録、梅棹忠夫全集第一六巻、山と旅、一九九二
- ・今西錦司編、ヒマラヤへの道、中央公論社、一九八八
- ・宮崎武夫、鈴木信、内蒙古の調査旅行、山岳三六年第一号、p.p.139-166、第二号、p.p.51-104、一九三八
- ・鈴木信、一つの構想、岳人、創刊号、p.2、一九四七
- ・千田貢、鈴木信先生を偲ぶ、ポラログラフィ、二六（一）、p.p.15、一九八〇

## 大日岳遭難について

本多 勝一

大日岳遭難について本誌でも書かれておりますが、私はこの問題にまったく関与しておりませんが、ところが今年の一月、私が自分の絵の個展を東京のある画廊で開いていたとき、この遭難で息子さんを亡くしたご遺族が突然訪ねてこられました。私は非常に驚いたのですが、彼らが私を訪ねてきたのは、

かつて遭難の現場を取材してあるいて、その真相をルポにして朝日新聞に発表したのをこ存じだったからでした。現役記者当時のものですが、これは今『リーダーは何をしていたか』（朝日文庫）として出版されています。

私は原則として、現場の取材をしない限りこの種の記事を書かないことにしていますから、それにもう現役の新聞記者ではないしトシもとって雪上登山がしんどいので、そのことを遭難者たちにも伝えて、この遭難のルポについては一応お断りいたしました。

ところが彼らは最近、自分たちの裁判の記録その他、参考になるもののコピーを私にどつさり送ってきました。私としては、やはり現場調査をしない限り関わる気はないのですが、一応これらを読んでみると、問題は単純ではないと思われました。現役のころであれば、同じ季節に現場へ登って取材したいところですが、今ではとてもそんなエネルギーも気力もありません。

ところで、この遭難はAACKとは直接の関係が全然ないはずですが、これまでに出た荻野さんや岩坪さんの文章を見たところ、ここまで関わる理由がよく分らないのと、文科省側の立場に立っているようにも思われます。この点はすこし慎重にされた方がよいのではないかという感想を抱きました。地元のカイドがどう見ているのかも気になります。

## 理事会決議録

### 一、日時

平成一七（二〇〇五）年三月二日（月）  
午後一時～午後三時四十分

### 二、場所

京都市左京区田中河原町 京大会館一〇五号室

### 三、出席理事

木村雅昭、前田栄三、田中昌二郎、上田豊、  
横山宏太郎、牛田一成、中川潔、永田龍、吹  
田啓一郎、竹田晋也、小林尚礼  
以上二一名

### 委任状によるもの

福蔭義宏、松沢哲郎、松林公蔵、人見五郎、  
山田和人、高尾文雄、清水浩  
以上七名

### 欠席理事

なし

### 出席監事

平井一正、伊藤宏範

以上二名

### 四、議事の経過および結果

会長木村雅昭が議長となり、「本日の出席者は定款第二一条第一項に示す定足数に達しているので正式に議事に入る」旨発言があり議事に入った。

### 第一号議案

平成一七（二〇〇五）年度事業計画につ

いて

理事吹田啓一郎によって作成された平成一七（二〇〇五）年度事業計画が説明された。特に新しい事業として、第三事業四項の海外登山・探検助成制度の設立と運用、第一事業一項（三）の雲南懇話会への運営の協力と支援が追加され、また第四事業一項の会員名簿は隔年発行とすることが提案された。逐一審議の結果、満場一致でこれを承認した。なお、会員名簿については個人情報保護法の主旨に鑑み記載内容について改めて会員個人に確認すること、物故会員の記載内容を検討することが意見として出された。

### 第二号議案

平成一七（二〇〇五）年度収支予算について

理事竹田晋也によって作成された平成一七（二〇〇五）年度収支予算が説明された。新たに設立された海外登山・探検助成制度は第三事業の調査助成費から支出すること、梅里雪山隊収容作業ならびに現地明永村の記念事業費（一〇〇万円）に特別会計遠征基金の調査補助金から支出することなどに付いて逐一審議の結果、満場一致でこれを承認した。

### 第三号議案

海外登山・探検助成制度の運用について

理事吹田啓一郎によって作成された海外登山・探検助成制度が説明され、逐一審議の結果、満場一致で運用規程と申し合わせ事項を承認した。

また、本規程第三条に定める審査委員会の委員として次の五名を選出した。

海外登山・探検助成審査委員会

委員長 平井一正

委員 阪本公一、松林公蔵、高尾文雄、小林尚礼

なお、平成一七（二〇〇五）年度は総会での承認後に助成の決定を行うことを承認した。

#### 第四号議案

新入会員について

担当者より下記一名の本会入会申請者の紹介があり、満場一致で承認した。

栗本俊和

#### 第五号議案

遠征基金の運用について

特別会計遠征基金の調査補助金に対して次の二件の補助が申請され、逐一審議の結果、満場一致でこれを承認した。

（一）副会長前田栄三より雲南懇話会の主旨と活動計画が説明され、活動支援のため一〇万円の補助が申請された。

（二）監事平井一正より日本山岳会一〇〇周年記念事業への協賛として二〇万円の補助が提案された。

議長より「本日の社団法人京都大学学士山岳理事会の議事は以上をもって終了したので、議事の経過は議事録にまとめ、その末尾に議長ならびに理事二名が署名捺印すること」として閉会を宣言した。

平成一七（二〇〇五）年三月二日

## 理事会決議録

一、日時

平成一七年五月二五日（日） 午後一時

午後二時三〇分

二、場所

京都市左京区吉田河原町 京大会館一〇二

号室

三、出席理事

木村雅昭、福蔭義宏、上田豊、松林公蔵、

中川潔、人見五郎、永田龍、吹田啓一郎

以上八名

委任状によるもの

前田栄三、田中昌二郎、横山宏太郎、松沢

哲郎、牛田一成、高尾文雄、竹田晋也、山田

和人、清水浩、小林尚礼

以上一〇名

欠席理事 なし

出席監事 平井一正、伊藤宏範

以上二名

四、議事の経過および結果

会長木村雅昭が議長となり、「本日の出席者は定款第二一条第一項に示す定足数に達しているので正式に議事に入る」旨発言があり議事に入った。

#### 第一号議案

平成一六年度事業報告について

理事吹田啓一郎により平成一六年度事業報告が説明され、逐一審議の結果、満場一致でこれを承認した。

#### 第二号議案

平成一六年度収支決算について

理事吹田啓一郎により平成一六年度収支決算が説明され、逐一審議の結果、満場一致で承認した。

#### 第三号議案

役員の変更について

議長より任期満了に伴う本会役員の変更について、下記のとおり改選候補者案が提出され、審議の結果満場一致で承認した。

理事

木村雅昭（会長）、松林公蔵（副会長）、前

田栄三（副会長）、田中昌二郎、福蔭義宏、上

田豊、横山宏太郎、松沢哲郎、牛田一成、中

川潔、永田龍、人見五郎、吹田啓一郎、山田

和人、高尾文雄、竹田晋也、小林尚礼

以上二七名

監事

西山孝、伊藤宏範

以上二名

#### 第四号議案

海外登山・探検助成制度の運用規程について

理事吹田啓一郎により海外登山・探検助成運用規程の改正案が説明され、逐一審議の結

果、満場一致でこれを承認した。

議長より、「本日の社団法人京都大学学土山岳会理事会の議事は以上をもって終了したので、議事の経過は議事録にまとめ、その末尾に議長ならびに理事二名が署名捺印すること」として閉会を宣言した。

平成一七年五月二五日

## 総会決議録

一、日時

平成一七年五月二五日(日) 午後三時、

午後四時三〇分

二、場所

京都市左京区吉田河原町 京大会館一〇二号

室

三、出席者

正会員の総数 二七三名

出席者数 一六一名(うち委任状

出席 一二五名)

四、議事の経過および結果

上記のとおり定款所定数の出席があり本会は適法に成立したので理事(会長)木村雅昭が定款の規定により議長となり、下記議案の審議に入った。

第一号議案

平成一六年度事業報告および収支決算について

担当の者より平成一六年度事業報告および収支決算について報告があり、逐一審議の結果、満場一致でこれを承認可決した。なお、収支決算報告書に決算額の詳細も分かる記述を求める意見が出され、記載方法を検討することが確認された。

第二号議案

平成一七年度事業計画および収支予算について

議長は原案について担当者に説明を行わせ、これを議場に諮ったところ、満場一致で原案どおり承認可決した。

第三号議案

役員の改選について

議長より任期満了に伴う本会役員改選について、下記のとおり改選候補者案が提出され、審議の結果満場一致で承認した。

理事

木村雅昭(会長)、松林公蔵(副会長)、前田栄三(副会長)、田中昌二郎、福蔭義宏、上田豊、横山宏太郎、松沢哲郎、牛田一成、中川潔、永田龍、人見五郎、吹田啓一郎、山田和人、高尾文雄、竹田晋也、小林尚礼  
以上一七名

監事

西山孝、伊藤宏範

以上二名

第四号議案

海外登山・探検助成制度の設立について  
担当者によって作成された海外登山・探検助成制度が説明され、逐一審議の結果、満場一致で運用規程と申し合わせ事項を承認した。

第五号議案

新入会員について

平成一七年三月二二日開催の理事会において承認を得た下記一名の本会入会申請者の紹介があり、満場一致で承認した。

栗本 俊和

以上をもって議案全部の審議を終了したので午後四時三〇分議長は閉会を宣し解散した。上記の決議を明確にするため議長および議事録署名人において次のとおり署名押印する。

平成一七年五月二五日

## 海外登山・探検助成制度の創設

今年度から会員個人の海外登山や探検的な活動を支援する目的で助成制度を創設しました。今年三月の理事会で決議され五月の総会で承認を得ましたので施行します。助成の財源は会員の会費を充て、審査委員会の審議を経て、理事会で助成の決定をいたします。

現在の本会の一般会計収入は、約一〇〇万円の会費収入と、五〇万円程度の著作権収入からなり、その二〇%にあたる三〇万円を本助成の予算に充てた、新しい事業です。海外登山・探検を計画されている会員には奮ってご応募ください。以下に助成制度の詳細を説明します。

#### (一) 申請方法

下記の事項（申請時の予定で構いません）を記した会長（木村雅昭）宛の申請書（A4紙に五枚以内）を作成してください。送り先はAACK事務局長宛に郵送、あるいはPDFを電子メールでお送りください。送り先〒612-8325 京都市伏見区清水町八六七 三吹田啓一郎、または  
suifa@archi.kyoto-u.ac.jp

- 一）隊または計画の名称
- 二）申請会員名と連絡先、Eメール等
- 三）隊の構成（氏名、年齢、所属山岳会）、AACK会員外の参加も認めます
- 四）対象国・山域・地域
- 五）概略のルートと日程
- 六）予算
- 七）隊の特徴などのアピール（計画の目的・意義と対象地域・活動内容、準備状況、隊員構成の関係など）
- 八）助成金の振込先（銀行名、名義、口座番号等）

#### (二) 海外登山・探検助成制度 運用規程

第一条 海外登山・探検助成制度（以下、助成と称す）は、バイオニア的ないしオリジナリティのある海外登山や探検的活動の助成を目的とする。

第二条 助成の対象は本会会員が主催する計画とし、申請者は本会会員に限る。助成に際しては審査委員会の審議に基づき、理事会が決定する。

第三条 審査委員は理事会で選出する。委員の任期は二年とし、再任を妨げない。

第四条 助成金額は一件一〇万円を原則とし、年間三〇万円を上限とする。ただし理事会が認めた場合はこの限りでない。

第五条 本規程は二〇〇五年五月一五日の総会の承認を得て施行する。

#### 申し合わせ事項

一 助成の決定は原則として年一回三月に行い、予算に余裕があれば九月にも行う。

#### (二)

二 助成を申請しようとする者は会長宛に文書により申請し、事後三ヶ月以内に報告書を提出しなければならない。報告書はAACKニューズレターならびにホームページに掲載する。

三 一計画につき一申請だけ受け付ける。

今年度は総会の議決を待って五月の募集としましたが、次年度から年初に募集します。これ以外の時期に希望する場合は理由を付して申請されれば、予算内で適宜受け付けるようにします。

## AACK遠征基金について

AACKには一九七五年に京都大学学士山岳会遠征基金が設立され、翌年から施行されました。この基金はかつてAACKが主催した海外遠征のための資金を基に設立され、海外遠征の実現に向けた様々な活動に対して理事会の審議を経て調査補助金として支出してきました。これに対して、今年から新設する助成金は会員個人の海外登山を支援するもので、これら二つの助成制度がAACKの登山振興の制度となります。以下に、遠征基金の運用規程とこれまでの助成実績をまとめてご報告します。

#### AACK遠征基金運用規程

第一条 AACK遠征基金（以下基金と称する）は、本会が行う学術的基礎にたつ海外登山ならびに探検を推進発展させることを目的として設立されたものである。

第二条 本基金は、第一条の目的を達成するうえで必要な予備踏査、および研究・調査ならびに物品の購入等に使用するものとする。

第三条 使用金額については、原則として利息の範囲内とする。ただし、理事会が必要と認めた場合はこの限りではない。

第四条 本基金の運用に関しては理事会で協議する。

第五条 本規程は昭和五一年九月七日から施

行する。

申し合わせ事項

昭和五十一年九月七日、理事会で申し合わせ  
一、本基金は、予備踏査等、将来に向けての  
建設的な運用を行うよう努力する。

二、本基金の助成を受けようとするものは、  
会長宛文書により申請し、事後、報告書  
を提出しなければならない。

遠征基金助成実績

申請年月日、申請者、内容、金額

1979.3.15、齋藤惇生、チベット高原親善学  
術登山遠征隊実現のための訪中、105,570円

1979.3.10、西山孝、チベット高原親善学術  
登山遠征隊実現のための訪中

1979.3.10、柘弓絃、チベット高原親善学術  
登山遠征隊実現のための訪中

1979.9.1、横山宏太郎、日本山岳会チヨモ  
ランマ峰偵察隊準備国内旅費

1980.2.10、甲斐邦男・横山宏太郎、日本山  
岳会チヨモランマ峰偵察隊準備国内旅費

1980.2.15、太田岳史、京大山岳部ネパール  
ヒマラヤトレッキング隊

1982.3.7、森戸隆男・幸島司郎・近藤裕  
史・中川潔・牛田一成、チベット高原学術登  
山隊、各30万円貸与（帰国後返済）

1982、中島暢太郎・伊藤宏範、京大山岳部  
インド遠征隊部員4名、40万円

1982.9.22、富永浩三・篠崎敏明、プータン  
遠征実現のためのプータン渡航、20万円

1983.3.13、高井正成・月原敏博・松井尚

純・吹田啓一郎、プータントレッキング隊、  
60万円

1985.5.17、坂本勉・広瀬顕・小林正真、京  
大探検部唐古拉山脈登山隊、45万円

1985.8.22、プータン・マサコン隊12人、  
180万円

1988.6.25、人見五郎他5人、コンロン隊、  
125万円

1992.10.14、戸部隆吉、堀了平、齋藤惇生、  
中島道郎他18名、ヒマラヤ学誌買上げ、96万  
円

1998.9.1、睦好正治、西川、ラフチカン隊、  
40万円

1999.5.24、小林尚礼、リヤンカンカンリ隊、  
20万円

日本山岳協会・山岳共済（一般共済）について

日本山岳協会が実施する山岳遭難共済制  
度についてご案内します。所属山岳会（AA  
CK）を通じて加入する制度なので、加入を  
希望される方は以下の要領で手続きを行って  
下さい。山岳共済の条件として加入者は所属  
山岳会へ登山計画書を提出することが義務づ  
けられていますので、その方法も記していま  
す。なお、この制度の運用に必要な業務は堀  
内潭様、阪本公一様に委託し、ご協力をいた  
だいています。

一、山岳共済の種類

国内山行を対象に五種類の基本タイプが用意  
されており、さらに入院・通院補償と海外山  
岳共済の二種類の追加オプションがありま  
す。

一）基本タイプの保険金額と会費は次の五  
種類です。

タイプ	会費(年額)	死亡・ 後遺障害	遭難捜索 費用	個人賠償 責任
A	5,500円	180万円	200万円	なし
B	6,200円	200万円	200万円	1億円
C	8,000円	300万円	250万円	1億円
D	11,000円	400万円	350万円	1億円
E	18,000円	1000万円	500万円	1億円

二）入院・通院補償

会費は4,000円の追加です。保険金額は一日  
につき入院3,300円、通院1,000円です。

三）海外山岳共済

会費は10,000円の追加です。保険金額は死亡  
後遺障害100万円、救援者費用500万円、個人  
賠償責任一億円です。

四) 期間は毎年四月一日から翌年四月一日午後四時までです。中途加入の場合も払込日の翌日から次の四月一日午後四時までで、会費の額は変わりません。

## 二、加入の手続き

加入を希望する方は、必要事項を明記した加入申込書を、AACKの指定する山岳共済担当者(堀内潭様)に提出し、指定の銀行口座に会費を振り込んでください。

(一) 加入申込書には次の八項目を記入してください(書式自由)。

氏名(フリガナ)

生年月日

郵便番号と住所(フリガナ)

電話番号、FAX番号

電子メールのアドレス(ある場合)

職業

加入タイプ(A、E)と入院・通院補償、

海外山岳共済の追加希望

他の山岳保険の加入状況(一般的な生命

保険は含まず)

担当者の連絡先は次の通りです。できるだけ

電子メールでお送り下さい。

電子メール:

FAX:

郵便:

(二) 会費の振込口座(申込みと同時に振り込んでください)

銀行: 池田銀行 川西清和台支店(店番号

335)

口座番号: 普通預金

名義: AACK山岳保険 堀内潭(読みは、ホリウチ フカシ)

(三) 担当者が山岳共済事務センターへ加入申込みと会費の振込みを行います。この振込日の翌日から保険は有効です。振込の翌月に日本山岳協会より一般共済会員証がAACK担当者に送付されてくるので、担当者から本人に回送します。毎年三月一五日までにAACK担当者へ申込みと会費振込をしていただければ、四月一日から有効となるように手続きします。

二〇〇五年度は、年度の途中での案内のため例年よりも手続きが遅くなり五月一九日を申込期限とします。それまでに上記の手続きで堀内様へ連絡・送金してください。五月二〇日に送金し二二日から有効となるように手続きする予定です。

## 三、加入者の山行・登山計画書の提出

加入者は山行時に次のことを守って下さい。

(一) 山岳共済の適用を受けるには、日帰りハイキング以外のすべての山行(沢歩き、岩登り、積雪期の登山、及びすべての泊まりがけの山行)で登山計画書を提出する義務があります。

(二) 登山計画書には次の事項を記入して下さい。

登山目的、日程、ルート、メンバーの氏名・年齢・住所・電話番号、

留守本部、最終下山日、共同及び個人装備

食料(実働・予備日明記)

(三) 登山計画書の提出先は阪本様です。できる限りワープロなどで作成したファイルを電子メールに添付して

へお送り下さい。できない場合は、下記の自宅へ郵送して下さい。

(四) 下山後、阪本様へ速やかに電話やメールで下山報告をしてください。

(五) 阪本様が担当するのは登山計画書のとりまとめで、留守本部ではありません。留守本部は必ず山行計画者が自己の責任で定めてください。万一の事故発生時の捜索救援体制も、山行計画者が事前に検討しておくべきことであることをご承知ください。

(六) 登山計画書を提出しない方は次年度の加入をお断りします。

## 四、山岳共済の制度について

以下に山岳共済の概略を説明します。

(一) 日本山岳協会山岳共済会が契約者で、山岳共済会の会員が被保険者となります。AACKは日本山岳協会傘下の京都府山岳連盟に加入する山岳団体であるため、AACK会員は山岳共済会への加入資格を持ちます。個人の加入は受け付けられず、AACKの保険担当が一括して手続きします。堀内潭様を保険担当者として日本山岳協会へ届けています。

(二) 契約期間は毎年四月一日から翌年四月一日午後四時までです。中途加入も受け付け

られますが、その場合は払い込みの翌日から四月一日午後四時までとなります。本年度は年度途中の加入になるので、割高であることをご承知ください。

(三) 基本タイプの補償には、国内山行中の事故による死亡・後遺障害の保険金、遭難による捜索・救出・移送の活動で請求された費用を支払う遭難捜索費用保険金、事故により賠償責任を負わされたときの損害賠償金・訴訟費用等を支払う個人賠償責任保険金の三種類が含まれています。山行のために住居を出発してから戻るまでの間が対象となります。また、疾病(高山病を含む)による死亡、救出移送後の医療費、海外の山行などは保険の対象外です。

(四) 遭難事故で移送された後の入院、手術、通院の補償はオプションで追加会費を払えば付帯できます。

(五) 海外山行の補償を希望する場合は、基本タイプに追加会費を払って海外山岳共済に加入すれば年間通算六〇日まで補償の対象となります。海外山行の場合は出発一〇日前までに「海外山岳登攀計画」を山岳共済事務センターへ郵送する必要があります。

(六) 山岳共済は単なる遭難事故補償制度だけでなく、山岳団体が会員の山行を管理して遭難防止に役立つことを目的にしています。そのため、所属山岳団体に登山計画書を提出することが必須の条件となっています。

(七) 山岳共済に関する疑問点や、更に詳しい説明が必要な場合は、担当の堀内様にお問い合わせください。また、日本山岳協会

ホームページにも説明があります。

<http://www.jinsangaku.or.jp/>

[insurance/index.html](http://insurance/index.html)

## 新入会員の紹介 栗本俊和氏

前田 栄二

栗本俊和さんは、一九七二年三月に京都大学工学部資源工学科を卒業され、七四年同修士課程修了。笹ヶ峰会会員です。私とは、二〇〇二年十一月の初冬の富士山登山が初対面でした。この時はもう一人の紹介者・芝田正樹君も同行。栗本さんは、昨年三月に「世界の山・日本の山」栗本俊和のHP」という彼自身のホームページを立ち上げていますので、HPを訪問し最近の活動ぶりを披露することで、彼の紹介に代えさせていただきますと思います。

海外の山は、二〇〇〇年四月のカラパター(五五五〇m)を始め、二〇〇一年、キナバル(四一〇一m)、キリマンジャロ(五八九五m)。二〇〇二年、アコンカグア(撤退)、エルブルース(五六四二m)、二〇〇三年、チンボラソ(六三二〇m)。そして二〇〇四年にはアコンカグア(六九六二m)、オリサバ(五七〇〇m)登頂と続きます。国内も昨年は春夏秋冬、毎月良く歩かれています。彼は、一九四九年一月一日生まれ。生まれ育ちは京都。中学そして山城高校時代は北山へよく出かけたそうです。京大二回生の春、

山岳部に入部、一年後スキーによる捻挫がもとで退部。在学中は夏の知床半島縦断、西表島(沖縄(探検的)旅行、太平洋(ヤップ・パラオ・アンガウル)島めぐり、四回生の夏のヨーロッパ旅行四〇日間(モンブラン単独登山を含む)等など、よく動いています。

今回、彼にACKへの「登録」を促し、快諾をいただいたものです。早速、崑崙の未踏峰の登山にも参加の意志を表明されるなど、元気なところを見せてくれています。

## 書籍紹介

「山・わが生きる力」

白旗史郎著(新日本出版社)

阪本 公一

白旗史郎氏は、御存知のように山岳写真の大家である。岡田紅葉さんに師事されて富士山を撮り始めてから、南アルプス、北アルプス、中央アルプスや八ヶ岳、そして北海道、東北の山々等も黙々とじみちに登り、日本全国の山岳写真を世に紹介された。そして、日本の山が一段落すると、今度はネパール・ヒマラヤやパキスタンのカラコルムにも何度か通い、素晴らしい山岳写真集を出版された超一流の山岳写真家である。

白旗さんの素晴らしい写真をみてみると、なぜかわくわくしてきて興奮する。「こんな素晴らしい山に、私も登ってみたい。登れなくても見るだけでもいいから行ってみたい。」

と見る者の心を躍らせる。

白旗さんの山岳写真には実に素晴らしいが、それにもまして、白旗さんの山にたいする真面目な真摯な態度に、私は共感する。首記著作「山・わが生きる力」に書かれている白旗さんの山登りについての考え方、山の哲学を、是非皆さんにも知って戴きたいと、その一部を抜粋して紹介する。

\* 私にとつて山とは、つねに変わらず新鮮な存在である。それは登るたびごとに、考える対象としても同様である。

山には一度として同じできごとではなく、同じ顔、一表情や条件がないからである。出かけて行くたびに、登るたびに、新しい刺激と感動を私にあたえてくれる。それは一期一会というべきか、そして、そこから学ぶべきことがいろいろ出てくるのだ。

現在、すでに日本中の山がすべて登られ、世界のさまざまの山も登り尽くされた感があり、未踏峰などほとんどが残されていないが、いまなお山という不思議な存在は、未知という領域を残して、私たちをその山のふところに誘うのだ。そこには単に、山に登るといふ即物的な行為とは別に、人の心をとらえてはなさない何かがあるのでないか。

私はそれが「バイオニアワーク」であり、そして、それに対する可能性ということとは依然として通用するのではないかと考えるのである。

\* 現在は一見すると、社会も山もすべてが

トレースされてしまっていて、新たなバイオニアワークなどを試みる場所など皆無のように思える。ことに現代の社会、世界情勢を展望するとさらにその感が深い。

しかしそれは、そうだと思ひこんでいる人間の心の問題であり、物事に対する視野の狭窄ではないかと私は考える。

すべての物事には、人間の心につねに新しい感動を与える力がある。それ一つをとつてみてもバイオニアワーク皆無などということとは決してないはずであり、考え方ややり方によつてバイオニアワークの場所はあると思つのである。

\* 前述したように、山を例にとつてみれば、

一度、二度、三度、さらに一〇回、二〇回、一〇〇回登つても、人間には恐らく山のすべてを完全に理解することは出来ないと思ふ。だから、一回一回の山行そのものが、そのたびに新しいバイオニアワークとも言えるのである。単に登る、ということだけに限らず、一回一回の山行計画についても、今度はこの角度から登つてみよう、次には別の解釈により反対側を選んでみようとか、もっと困難がルートに挑戦してみようといったようないろいろな方法がある。それはすでに他人がやったから、ということはあるても、自分にとつては初挑戦である。

そう考へて行けば、バイオニアワークの可能性は無限にひろがるのである。

\* 考へてみると、バイオニアワークということばは、すばらしいひびきをもっている。

人間の一生、ただ一回しかない生き方、それ自体バイオニアワークといえると思うが、私も自分の人生はバイオニアワークでありたいと念願している。

ゴーイング・マイ・ウェイということばがあるように、俺はこう生きるんだとの人生が他人の模倣であつてはならない。

一度しかない人生が終わつたとき、もしそれが他人の生き方を真似たものだつたら、余りにもさみしいではないだろうか

## 会員動向

### 新入会員

ご指摘頂いた甲南山岳会の越田和男、飯田進両氏に感謝する。

平井正

## 訂正 一

前号（NO.34）編集後記冒頭「伊藤愿さん」から八行目「だったのだらう。」まで、全く私の記憶違いにもとづく記述であり、ここにお詫びし、削除をお願い致します。

また、ご指摘頂きました平井正会員に厚く感謝致します。

田中昌二郎

## 雲南懇話会の11報告と

### Field Work の11案内

第一回雲南懇話会が、二〇〇五年三月二六日（土）午後東京神田の学士会館で開催され、約一〇〇名の参加を得て盛会でした。皆様のご支援ご協力を感謝します。懇話会の内容については、AACK Newsletter No.34でご案内したとおりですが、以下に再掲します。

#### 一・「開会の挨拶」

松浦祥次郎（会員）

「発起人」を代表して

#### 二・「雲南への道（青海省から雲南へ）」

田中昌二郎（会員）

#### 三・「聖山の麓の暮り」

小林尚礼（会員）

#### 四・「雲南の山の植物」

並河治（会員）

#### 五・「山を考える 今、考える事」

## 訂正 一

前号（NO.34）「AACK人物抄 伊藤愿（イトウスナオ）さん」において、伊藤愿の名前をスナオとカナをふったが、それは岳人事典（昭和五八、東京新聞出版局）他多くの本を参考にして書いたものである。しかし伊藤本人の履歴書によるとゲンとあり、正しくはゲンであるという指摘を受けた。訂正してお詫びする。

本多勝一（会員）  
六、「ラオスの林業事情、山岳民族等」

渋谷幸弘（国際協力機構）  
七、「雲南の學術調査 地学的視点から」  
安仁屋政武（会員）

引き続き開催された「茶話会」には約六〇名の方々が参加され、交流を深めました。

その後、様々な感想・ご意見・ご提言などいただいています。この場をお借りしてお礼を申し上げ、次回以降に反映させていきたいと思えます。ありがとうございました。



次回、第二回雲南懇話会は、本年一月九日（土）に東京で開催する予定です。

### 雲南懇話会「Field Work」の案内

第一回Field Workは、本年一〇月に実施すべく準備を進めています。

日程 二〇〇五年一〇月二三日、関空出発  
行程 徳欽→明永村→雨崩村→飛来寺を訪  
問、一月六日帰国。

定員 最大定員九名、小林尚礼会員が同行  
します。

現時点で、沖津・安仁屋・前田（栄）各会員のほか三名、計六名の参加希望が寄せられています。

参加ご希望の方は、前田栄三、または小林尚礼まで一報ください。

第二回Field Workは、第一回と同じ行程で二〇〇六年五月下旬からの二週間（最大一五日間）を予定しています。（目下、四名の参加希望が寄せられています。）

### 懇話会組織についてのお知らせ

山岸久雄会員が新たに代表代行に就任しました。

文責：雲南懇話会事務局 前田栄三

### 編集後記

文献センター目録「979 ウム・デン・カ  
ンチ（バヴェル原著）」につき、竹田晋也会  
員が京大図書館の所蔵一覧にアクセスしてい  
ただき、『ウム・デン・カンチノバヴェル  
著・慶應山岳部々員有志訳』、1936.7.』であ  
る事、上田豊会員からは、なおそれは薬師義  
美会員著『ヒマラヤ文献目録』（白水社一九  
八四）によれば、「抄訳」であるなど、詳しく  
お知らせいただきました。ありがとうございました。  
きちつとした資料によらないでは  
書かない事を、今後の戒めといたします。

次号の原稿締切日は八月一〇日、九月中旬  
発行の予定です。奮ってご寄稿頂きますよう  
お願い致します。

（田中昌二郎）

編集委員 田中昌二郎

発行日 二〇〇五年七月末日

発行所 京都大学学士山岳会

〒611-0011 宇治市五ヶ庄

京都大学防災研究所

吹田啓一郎 気付

製作 京都市北区小山西花池町一八

（株）土倉事務所